

アジアの 蚕

第10号
2005年10月1日発行

題字：宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター (〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1)



アジアの絵本への熱いまなざし 鎌倉での「和歌山静子・アジア絵本ライブラリー」展示会場で

第8回アジア児童文学大会 2006年8月21～25日 ソウル市で

第8回アジア児童文学大会の大纲が決まりました。児童文学研究の地平を広げるべく、第4回大会と同じく欧米の研究者を招いて「世界児童文学大会」を兼ねたかたちで開催されます。詳しい要項は間もなくセンター会員の皆さんにご連絡しますので、ここでは要点のみのお知らせです。

◇期間：2006年8月21日(月)～25日(金)

◇会場：大韓民国ソウル市 ヒルトン・ソウル・ホテル(予定)

◇テーマ：“平和を志向する児童文学”

サブ・テーマ ①生態学的観点(エコロジー)での児童文学 ②幻想童話(ファンタジー)の展望と未来
③共存志向の児童文学 ④多様な試みの児童文学

◇参加費：600USドル(4泊5日宿泊費を含む)

◇発表：日本、中国、韓国、台湾、朝鮮は、上記サブ・テーマ①～④に各1名づつ計4名発表することができる。発表時間は1人15分以内。(発表者の選考については、追ってセンターから連絡します。)

◇参加申込み：2006年2月28日まで。

	タイトル	原作者	訳者	発行所	発行月
①	ソヨニの手	チェ ジミン	金松伊	汐文社	1月
②	おばけのウンチ	クオン・ジョンセン	片岡清美	汐文社	1月
③	いっしょにごはんたべよ	ペク・ソク文 ユ・エロ絵	ピョン・キジャ	平凡社	1月
④	問題児	パク キボム	金松伊	汐文社	2月
⑤	知るもんか!	イ ヒョンジュほか	ムグンファの会	汐文社	2月
⑥	このよでいちばん大きな男の子	キムセシル文 クオンジェリョン絵	かみや にじ	少年写真新聞社	2月
⑦	あまのじゃくなかえる	イ サンベ文 キム ドンソン絵	かみや にじ	少年写真新聞社	2月
⑧	うさぎのさいばん	キムセシル文 ハン テヒ絵	かみや にじ	少年写真新聞社	2月
⑨	こだぬきさんちのはるむかえ	クオン・ジョンセン作 ソン・ジンホン絵	仲村修	フォレストブックス	2月
⑩	秘密の島	ペ ソウン	金松伊	汐文社	3月
⑪	中国朝鮮族児童文学短篇選集	リヘソンほか	木下豊二郎	私家版	3月
⑫	鬼神のすむ家	安美蘭ほか	オリニほんやく会	素人社	4月
⑬	あめにふる ひに…	イ・ヘリ文/絵	ピョン・キジャ	くもん出版	5月
⑭	北十字星文学 14号	方定煥ほか	北十字星文学の会	北十字星文学の会	6月
⑮	悲しい下駄	クオン・ジョンセン	ピョン・キジャ	岩崎書店	7月

汐文社刊の①②④⑤⑩は、「今読もう！韓国ベスト読みもの」シリーズ。「はだしのゲン」韓国語版を訳した大阪の金松伊（キムソンイ）さんの編・監修。大きなシリーズではあり韓国児童文学をアピールする好機だったが、作品選択や翻訳面で残念な点も。⑤は30年前の作品集で、時代に寄りかかりすぎた作品が、現代もなお価値を発揮できるのだろうか、と考えてしまう。②は一読してみたいもの。⑩は東南アジアを舞台にしたファンタジー冒険の作品でけっこう読ませる。

③は発掘再評価された詩人白石（ペクソク）の児童文学作品を絵本化したもの。文学遺産の再評価は近年の傾向のひとつ。

⑪は得がたい個人作業であり4冊めの私家版。3編の伝説もふくみ、刊行のたびに訳がこなれてくる。

⑫は「オリニほんやく会」（大阪）の第4童話集。月1回の例会で3年間かかった相互批評作業のまとめ。ファンタジーや創作民話をふくみ、多様化した韓国児童文学状況を鳥瞰できる。訳者11人の中にはきどりのこさんや金永順さんもいる。出版社の要請により、初刷りわずか千部で4巻中最低という悲劇的状况。

⑭はもう歴史の長くなった翻訳同人雑誌。童話・民話をいつも4、5編紹介。失礼ながら、もっとこくのあるスープを味あわせていただけたら、という気分になる。

⑮は日本でもおなじみの作家の日本時代の自伝的作品。戦前の在日の子どもの目見た戦争児童文学

はこれが60年めで初。ただし、東京大空襲翌日で作品は終わり、疎開、解放、46年の引揚げなどが描かれていないのが残念。かつてな想像だが、日本に残留し社会主義を志向した兄二人との家庭内の葛藤・離別など、リアルに描くにはいまだ作家の胸はうずくのではないだろうか。

【全体に】点数的には出ているほうか。新しい訳し手・出版社の参画がうれしい。それにしても翻訳家への道は険しい。韓国朝鮮児童文学自体の修行、(児童)文学一般の修行、日本語の練磨、さらには会話能力をアップしての積極的な(絵本)作家たちとの出会い、セミナーへの参加等々。ため息がでできそうで恐縮だが、翻訳文学の伝えるべき感動は、こうした涙のフットワークのうえにしか成り立たないようだ。

なお、民話「こかげにごろり」（金森襄作再話、金淑香絵、福音館）が4月から東京書籍教科書小3に、韓国の創作童謡「青い心白い心」（魚孝善詞、韓竜熙曲）が同音楽小6に、また民話「引っこし」（李錦玉）が教育出版国語小4に採用されたことはうれしいことだった。

さいごに、7月に筆者が立ち上げたブログ「韓国朝鮮と子どもの文学・絵本*なんでもオリニネット」は「オリニの会」「オリニほんやく会」の準公式HPでもあり、たまにのぞいていただければ幸い。

* <http://eorini.blog.bai.ne.jp/>

悲しい下駄

クオン・ジョンセン＝作
 ピョン・キジャ＝訳
 高田勲＝画
 岩崎書店 2005年7月刊

戦後60年を迎えた夏、原爆忌を挟んで例年のごとく、いや例年以上に雑誌、新聞、テレビが特集をくんで過ぎた日を振り返った。しかし、総じていまだ解消されないアジア近隣諸国とのわだかまりを解く方途や、あるべき形を論じる記事が少なかった。これをどう理解すればよいだらう。あれは侵略戦争だったという確かな視点が、ここにきて揺らぎ始めているからか。さて、そんななかにあって岩崎書店から出版された権正生の「悲しい下駄」は、もう一度あの戦争が日本人にとって、朝鮮人にとって何であったのかを考えさせる作品だった。

物語の舞台は敗色濃くなった1944年の東京・渋谷の本町界限。小学校3年生の男の子チュニを軸に、鼻ぺちャのプニやうんこたれのヨンイ。孤児院からもらわれてきた花子や英子ら、長屋で暮らす朝鮮人と日本人の子どもたちの厳しい日常をていねいに描いている。なにもなかった時代だ。貧しさを共有しあった子どもたちは、遊びとも本気ともつかない複雑な気持ちを抱えて、下駄を空高く放り投げ、その日の夕食を占って一喜一憂する。なのに、戦争

悲しい下駄

権正生
クオン・ジョンセン＝作 ピョン・キジャ＝訳
高田勲＝画



1944年、敗色濃厚の日本。
 あのところ、大人たちの陰で
 朝鮮人と日本人の子どもたちは……。

は容赦なく、そんな子どもたちの心に支配する側と支配される側の立場のズレを生んでいく。作家はチュニの目をとおして、それらを浮き彫りにし、花子の悲しみも英子の無念さも、日本のために戦うんじゃない、自分のために戦うんだとって入隊したコリの悔しさも、そして朝鮮人をさげすんだ弘や一男兄弟の悲しみさえも、包み込んでいく。絵本「こいぬのうんち」の作家として日本でもなじみのある作家の視線の先には、いつも弱者がいる。

国際児童文学館からのお知らせ

シンポジウム 韓国と絵本

子どもの本の国際的な専門館である大阪府立国際児童文学館では、「絵本」をテーマに日韓交流を図り、その成果を全世界に情報発信したいと考え、韓国と日本を代表する絵本作家を迎えて、シンポジウム「韓国と絵本」を開催します。

- ◇ と き：2006年3月12日
- ◇ と ころ：大阪府立国際児童文学館（吹田市千里万博公園 10-6）
- ◇ 講 師：チョン・スンガク氏
 （絵本『こいぬのうんち』『あなぐまさんちのはなばたけ』『黄牛のおくりもの』など）
 田島 征三氏
 （絵本『しばてん』『ちからたろう』『ふきまんぶく』『とべバッタ』など）
 コーディネーター 大竹聖美氏（東京純心大学助教授）
- ◇ 参加費：無料
- ◇ 関連事業：論文集『韓国と絵本』（ハングル・英語・日本語）の作成・配布、お話会、人形劇等
 くわしいことは、後日 HP 上でお知らせします。 <http://www.iiclo.or.jp>

2004 年度

中国語圏児童文学の翻訳状況

成 實 朋 子

昨年度（2004年4月～2005年3月）に日本で出版された中国語圏の児童文学の翻訳について概観してみたいと思う。2004年度に翻訳出版された中国語圏児童文学で、筆者が把握しているのは以下の5冊である。（以下出版順）

◇『立夏のたまご 中国農村児童文学選』

蔡文良他著 中野淳子編 冬至書房 2004年5月

◇『赤い花』

陳致元作 朔北社 2004年7月

◇『ぼく、グジグジ』

陳致元作 宝迫典子訳 朔北社 2004年9月

◇『迎春花』

冰子著 馬場与志子訳 小さい旗の会
2004年9月

◇『アティと森のともだち』

嚴淑女作 張又然絵 中由美子訳
岩崎書店 2005年1月

まず気がつくのは、台湾の絵本が多いことである。なかでも陳致元（チェン・チーユエン）の作品が二作翻訳されているのが注目される。陳致元はポローニャ国際絵本原画展に出展するなど、新進気鋭の台湾の若手絵本作家だが、昨年は若い女性の思い出の旅を絵のみで表現したノスタルジックな絵本『赤い花（想念）』とアヒルの中で育つワニのグジグジをコミカルに描いた『ぼく、グジグジ（Guji Guji）』の二作が紹介された。2000年5月に発表された『赤い花』と2003年4月に発表された『ぼく、グジグジ』では全く画風も異なり、この作家がまだまだ伸び盛りであることを示している。彼の作品としては、他にも2003年度ポローニャ入選作の『小魚散歩』がある。これは *On My Way To Buy Eggs* と訳されて、欧米でも販売されており、好評を博している。少女が卵を買いに行く何気ない日常の一コマを扱ったこの絵本は、彼の作品の中でも秀れたものであり、日本での翻訳が望まれる一冊である。

同じく台湾の絵本としては『アティと森のともだち（春神跳動的森林）』も出版された。主人公少年アティは、父親と一緒に祖母のふるさとの阿里山へむかい、さくらの精を助けるために森の動物達と協力する。台湾原住民の文化を背景に、人間と自然との共生をファンタジックに描いた力作である。ややエコロジー思想が前面に出すぎたきらいはあるが、美しい絵の力もあり、魅力的な一冊に仕上がっている。

このように2004年度の中国語圏児童文学の翻訳では、台湾絵本の勢いを反映してか、台湾絵本の翻訳が目立った。今後ともこの傾向は続くことであろう。あと子ども向きのものではないのでここでは除

外したが、台湾のグラフィックデザイナー、ジミー（幾米）の絵本も相変わらず好調で、2004年度は『幸せの翼』（岸田登美子訳 小学館 2004年10月）が出版されている。

反面大陸の作品や文学書の翻訳紹介は低調であったと言わざるを得ない。その中で出版された『立夏のたまご』は異色の一冊である。「中国農村児童文学選」と副題が付いていることから分かるように、農村を舞台とした短篇を集めたアンソロジーとなっている。1980年代に発表された作品が主となっているため、少し懐かしい中国の農村の姿がそこに描かれている。編者があとがきで述べるように、急速な近代化の中で失われようとしている古き良き時代、ゆったりとした時間、中国の原風景を一瞬今に留めようとするかのような一冊である。

失われた時間や場所への追憶・追慕という意味では、『迎春花』も同様である。文革期の思い出や現在アメリカ在住の作者が見聞した在米華人たちのありようが忌憚無く綴られており、読んでいて幾度と無く胸のつまる思いがする。このように、昨年度出版された大陸出身作家の作品二冊はいずれも読み応えのあるものではあったと言える。もっとも子ども読者を対象とした、児童文学らしい児童文学の翻訳出版が見られなかったことは惜しまれる。

これ以外では長らく中国の児童文学を翻訳紹介してきた『虹の図書室』（日中児童文学美術交流センター）がリニューアルし、第1号（通巻21号）が2004年12月に発行された。これまでは作品の紹介が主であったが、作品紹介以外にも情報が載せられる形態となり、情報量が格段にアップした。リニューアル版の特集は「北曹南秦」。「北の曹文軒と南の秦文君」の意味で、現代の中国児童文学を代表する両名の作品が紹介されている。また今年で45周年を迎える中国児童文学研究会の機関誌『中国児童文学』（中国児童文学研究会）も2004年8月に14号が、2005年8月に15号が出た。15号には昨年アジア大会での彭懿氏の講演内容全文が掲載されている。

中国児童文学 第15号

昔話は何を伝えてきたか	君島 久子
「幻想」と「成長」	成實 朋子
葛翠琳試論	霜鳥かおり
中国絵本の世界	寺前 君子
冰子さんの童話	馬場与志子
講演記録・私とファンタジー	彭 懿
栄光のイバラの道—私と児童文学	蔣 風
艾青子ども詩集	小笠原治嘉
〔翻訳〕任大霖、賈平凹、曹文軒の作品	
ほかにインタビュー、雑感など	
《連絡先》寺前君子氏	
Tel. & Fax. 06-6932-7581	

中国大陸における

日本児童文学の翻訳について

成 實 朋 子

「安房直子の本はあったの？」

今夏、上海・南京路の上海書城を訪れた際に、十歳くらいの女の子に連れ母親がこうたずねるのを聞いた。どうやら少女は偶然手にした安房の童話に魅せられ、母親にせがんで続きを買いに来たようだった。

この女の子が探していた「安房直子の本」とは、昨年少年児童出版社から6巻セットで販売された『安房直子幻想小説代表作』（2004年3月）のことである。訳者は児童文学作家・彭懿氏。昨年のアジア児童文学大会（名古屋）での講演で彼自身が語ったように、安房直子の作品は、彭懿氏を日本へ、そしてファンタジーへと導いたきっかけである。このシリーズは、その彭懿氏の安房への熱い思いを凝縮したかのような美しい装丁となっている。冒頭の少女の反応を見る限り、読者のうけもなかなか良いようである。

日本の児童文学の翻訳紹介と言え、昔は聞雲に行われている感が強かったのだが、最近は彭懿氏や朱自強氏といった日本への留学経験があり、日本の児童文学事情に通じた人たちが増えたため、系統だった紹介がされるようになってきたように思われる。例えばこの兩名の仕事としては、2004年8月に接力出版社から出版された『龍子太郎（龍の子太郎）』（朱自強訳）、『誰も知らない小さな国』（朱自強訳）、『兩個伊達（二人のイーダ）』（彭懿訳）がある。昨年出版されたこの三冊は、日本の現代児童文学の中で、特に中国に紹介しておくべきものとして彭懿・朱自強両氏によって選ばれたものであろう。特に『誰も知らない小さな国』に関しては、もとの通り村上勉の絵が使われ、原作の味わいをそのままにかした作りとなっている。これまで中国で出版された翻訳児童文学は、概してブックデザインや挿し絵に対する配慮が乏しく、画家の名前がクレジットされることも少なければ、ともすればもとの挿し絵を改竄してしまうことさえもあった。そのことを思えば、隔世の感がある。

そうした絵に対する配慮が最も顕著に見られるのは、なんと言っても“絵本”であろう。中国では長らく絵本のことを“図画書”と読んできたのだが、ここ1・2年で急速に“絵本（中国語での読み方はホイベン）”という訳語が広まっている。最近では芸術性を重んじたものや、海外の絵本を翻訳したもののことは基本的に“絵本”と呼ぶことが多くなった。装丁も急速に良くなり、日本における絵本と大差ないものが出版されるようになってきている。例えば2004

年6月に南海出版公司から出版された『可愛的鼠小弟（ねずみくんの絵本）』シリーズは、ハードカバーで、ほぼ日本での絵本の装丁そのままに出版されている。翻訳に携わった文紀子ことポプラ社の中西文紀子氏によれば、他の本に比べて値段が高く、セット販売をしている（6冊セットで90元）ため、必ずしも売れ行きは芳しくないとのことだが、意識的な父母も増えているため、これから徐々にこの形態の絵本は普及していくことは間違いない。急速な少子化と教育熱の高まりによって、量よりも質を求める購買者層が特に都会で増えているのは確かなことである。

そのような教育熱心な購買者層を狙ってか、まもなく上海の福利会出版社が日本のベネッセと組んで、「楽智小天地（こどもチャレンジ）」を正式販売する（現在はテスト販売中）。日本の出版社であるポプラ社も北京に児童文学専門の書店をオープンした。中国の豊かな購買者層を狙って、国内外の出版社がしのぎを削っているのである。

そのため現在中国では多くの出版社が児童文学書を出版するようになった。これまでは児童文学の出版といえば、中国に三十数社ある少年児童出版社をはじめとする専門出版社が出版を担当するのが常であったのだが、最近では大人向け書籍の出版社も参入するようになった。例えば折原みとの『安娜德尔露星伝（アナトゥール星伝）』の全シリーズが2005年5月より中国で出版されているが、北岳文芸出版社という児童書の出版社ではない出版社が出版している。折原みとの作品のような、ティーン向けのシリーズ読物は、今後おそらく多くの出版社から大量に翻訳出版されていくことであろう。

このように中国において現代日本の文学作品が翻訳紹介される機会は目に見えて増えてきた。近年ブームとなった村上春樹や吉本ばななは言うに及ばず、現在中国の書店に行けば、『電車男』に『世界の中心で愛を叫ぶ（在世界中心呼喚愛）』と、日本でベストセラーとなった本をほぼ全て目にすることが出来る。そして日本の少年少女漫画で育った世代の青少年は、これをこだわりなく受け入れていくことだろう。これからは日中両国で子ども期・青年期に同じものを読んだ青少年が育ってくることとなる。日本と中国の文化的な距離は、皆が思うよりも意外と近いものとなっていくかもしれない。

中国児童文学通信 NO. 106

中 由美子：「任大霖先生逝世10周年追恩会」に参加して

成實 朋子：『戦地の子供』（国分一太郎）についてほか

《連絡先》寺前君子氏

Tel. & Fax. 06-6932-7581

《和歌山静子 アジア絵本ライブラリー》の絵本貸出し

画家の和歌山静子さんが長年にわたり収集されてきたアジアの絵本のコレクション「和歌山静子アジア絵本ライブラリー」も希望する施設や団体に貸出されています。貸出しの内容・条件はつぎの通りですが、詳しいことは直接問い合わせ先（メディアリンクス・ジャパン）にたずねてください。

貸出内容	韓国・中国・台湾・日本の絵本 合計412タイトル
貸出対象	図書館、美術館、学校、ボランティア団体など
貸出期間	特に規定はなし
貸出料	無料 ★ただし送料については各施設・団体で負担してください
問い合わせ・申し込み先	(株)メディアリンクス・ジャパン 電話：03-5206-1145 Fax：03-5206-1146 e-mail：info@medialynx.co.jp

和歌山静子さんがこのライブラリーに寄せる思いは、上記メディアリンクス・ジャパンのホームページに「和歌山静子さんからのひとこと」として載っています。

また『日本児童文学』7-8月号に掲載の和歌山さんのエッセイにも、このライブラリーのことが詳しく述べられています。



国際児童文学館もアジアの絵本を団体貸出し

大阪府立国際児童文学館では、国際交流事業のひとつとしてアジアの絵本の団体貸出しをはじめております。近年めざましい発展を見せている韓国と台湾の絵本から厳選した作品のセットを、翻訳がある場合には日本語訳も合わせて、無料で貸出しています。専門家による解説と各作品の内容要約を載せたパンフレットも用意されていますので、図書館での小展示に、また異文化教育や言語取得の教材に活用することができます。

すでに2006年3月までは予約が入っているようですが、引き続き2006年4月以降の申し込みを受け付けていますので、貸出し希望の方は下記の要領にしたがい、直接大阪府立国際児童文学館へ申し込んでください。

セット内容	① 韓国絵本 約100冊（日本語訳30冊程度を含む） ② 台湾絵本 約60冊（日本語訳10冊程度を含む） ★セットの一部のみの貸出しについては相談に応じます
貸出対象	学校、図書館、ボランティア団体など
貸出料	無料 ★ただし送料や貸出中の管理に要する費用等は書く団体でご負担いただきます
貸出期間	1日～1か月 ★個別に相談の上、決定します
問い合わせ先	財団法人 大阪国際児童文学館「絵本貸出セット」係 〒565-0826 吹田市千里万博公園 10-6 大阪府立国際児童文学館内 電話：06-6876-8800 Fax：06-6876-8686 e-mail：info@iiclo.or.jp

風のたより

インド児童文学の会の活動

昨年4月から9月まで、「蓮の花の知恵—インドの児童文学」という展示が東京・上野の国際子ども図書館で開催されました。日本で初めてのインド児童文学展として好評を博し、2万8千人を超える来場者がありました。この展示には、鈴木千歳氏を中心とする「インド児童文学の会」の皆さんが全面的に協力をされました。監修をはじめ、子ども向けイベントの講師、講演の通訳、パネル解説、展示本の翻訳等々、皆さんの協力によって展示は成功することができたと言えるでしょう。

この展示については、会の機関誌『チャンパの花』第六号（2004年12月）に鈴木千歳氏が報告されていますが、IBBYインド支部の機関誌『Writer and Illustrator』24・2号（2005年1月）にも鈴木氏の報告と、講演に來日したマノラマ・ジャファ氏のレポートが掲載されています。

なお『チャンパの花』第五号（2003年11月）には鈴木氏の論文「日本におけるインドの児童書—仏教説話から現代まで」と、資料「日本語で出版されたインド児童書リスト」が掲載されています。そもそもこのリストから昨年の展示企画が発想されたということですから、貴重な資料だと言えます。『チャンパの花』にはこのほか、毎号10篇近い創作の翻訳や伝承の紹介が載っており、たいへん読み応えがあります。『チャンパの花』で、インドの児童文学に触れてみませんか。

（連絡先：鈴木千歳氏 Tel.042-584-9774）

第4回韓国朝鮮児童文学セミナー

オリニの会・オリニほんやく会の主催する第4回韓国朝鮮児童文学セミナーが4月3日（日）午後、神戸学生青年センターで開かれました。今回は韓国の絵本編集者で翻訳家・研究者でもある厳恵淑（オムヘスク）氏を迎え、絵本や童謡を中心に発表や講演が行われて実り多いセミナーとなりました。主な内容は次の通りでした。

- ◇ 発表「おはなし—民話から」（金朱美）
- ◇ 発表「日本における韓国朝鮮児童文学 2004年」（仲村修）
- ◇ 講演「最近話題の韓国の絵本・童話」（厳恵淑）（通訳：金永順）
- ◇ 発表「創作童謡の歴史から」（仲村修）
- ◇ ビデオ視聴「韓国童謡80年史（MBC）」（通訳：梁玉順、吉仲貴美子、萩森勝）

参加者は関西の人が中心ですが、東京からの参加もあり、セミナー後の打上げでさらに交流が深まりました。

鹿児島市で日韓友情年記念図書展

鹿児島市立図書館では5月25日から6月30日まで「日韓友情年記念図書展」が開催されました。韓国でも出版された、鹿児島在住のたに・けいこ氏の絵本『鳥になった大クスの木』（「アジアの風」第9号で紹介）の原画をはじめ、韓国の民俗や芸能に関する本、韓国の絵本、観光ガイドブックなど、韓国に関する幅広い資料が展示されました。なお6月18日には、たにさんと韓国からの留学生とによる『鳥になった大クスの木』の日韓両国語の読み聞かせ会も開かれました。

また9月21日から5日間、森のおしやべり文庫の会主催の「絵本でむすぶ世界の心展」が鹿児島市立美術館で開かれ、これにもたに・けいこ氏の『鳥になった大クスの木』の原画が展示されます。なおたに氏は4月にイタリアの「ポローニア児童図書展」にも出かけて交流の輪をひろげ、この展示にはその成果とも言うべき各地の絵本も展示されました。アジアを基盤にし、さらに全世界へと広がる交流と友情、絵本はそれを支えています。

『小さい旗』創刊50周年を迎える

北九州市の児童文学誌『小さい旗』が11月1日で創刊50周年を迎えます。水上平吉氏を中心にした活動の中から数多くの作家、詩人が誕生しましたが、近年は水上氏と馬場与志子氏とによる現代中国児童文学の翻訳・紹介に注目が集まっています。『小さい旗』がアジア児童文学交流の拠点としても発展するよう、期待します。

（連絡先：水上平吉氏 Tel.093-661-4488）

国際児童文学学会プレ会議

国際児童文学学会（IRSCL）は2007年の世界大会を京都市で開催することを決定しており、正置友子氏を委員長とする実行委員会がすでに2年前から準備を進めています。去る3月末、そのプレ会議が開かれ、31日には神戸女学院大学で論文発表と懇親会が行われました。IRSCLの会員でもある畑中会長も出席し、懇親会ではアジア児童文学センターを代表してスピーチを行いました。アジアにおけるIRSCL会員は、日本を除くと、ごくわずかですので、この2007年大会を契機にアジア各国の研究者の積極的な参加、加入が期待されています。当センターとしてもできる限り支援をしていきたいと考えています。

なお2007年大会は8月25日から29日まで、国立京都国際会館で開かれます。使用言語は英語のみで、公開プログラムには日本語も使用されます。

作家紹介

動物のお話を書く

キム・ファン（金 晃）さん

キム・ファンさんのホームページから、プロフィールと執筆中の作品を紹介します。

- 1960年2月5日 京都市生まれ
- 1998年3月 「赤い手ぶくろをしたカマキリ」が第13回国民文化祭おおいだ記念・つむれ文庫創作童話賞・優秀賞を受賞。
- 2000年4月 「ニジクジラは海の虹」が第1回健友館文学賞入賞。
- 2000年11月 児童文学『ニジクジラは海の虹』が遊タイム出版から出版。
- 2001年7月 絵本『ジュゴンのなみだ』を素人社から出版。
- 2002年5月 絵本『のんとスナメリの海』を素人社から出版。
- 2003年11月 絵本『くちばしのおれたコウノトリ』を素人社から出版。

日本児童文学者協会会員、アジア児童文学日本センター会員、WWFジャパン会員、グリーンピース・ジャパン会員、ジュゴン保護キャンペーンセンター会員。

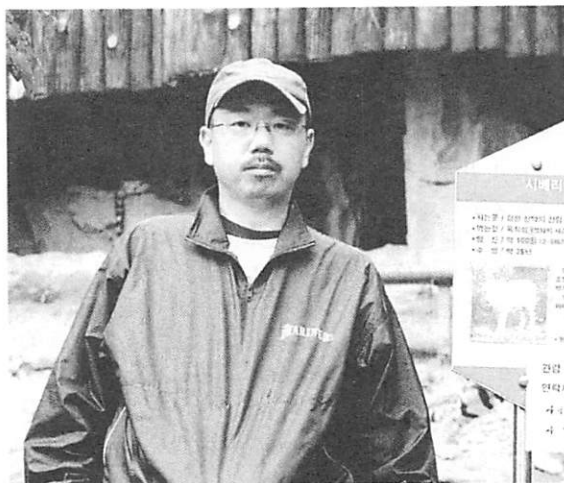
《新聞等に現在連載中》

- ◇「子どもと動物の話をしよう」
『毎日新聞・京都版』に2003年4月から隔週金曜日掲載。すでに連載70回を超える。
- ◇「童話作家のこぼれ話」
『週刊MDS』に2001年11月から毎月連載。すでに連載45回を超える。
- ◇「アリラン動物園へようこそ」
『朝鮮新報』に2005年1月から毎週連載。

《今後の出版予定》

- ◇『日本のコウノトリも韓国のコウノトリもよみがえれ！』
- ◇『サクラー 日本から朝鮮へ渡ったゾウたちの物語-』
来年、それぞれを日本と韓国で出版する。

キム・ファンさんの連絡先（HPアドレス）
<http://www.worldcorea.net/~kimfang/>
E-mail: kimfang@worldcorea.net



ソウル大公園で

発売中

『第7回アジア児童文学大会論文集』

- ◇ 日韓版（日本語・ハングル）201頁
 - ◇ 中英版（中国語・英語）188頁
- 頒価はそれぞれ2000円（送料はセンター負担）。ご希望の方は事務局・花井まで
(Tel. 0568-95-0091)

◇あしがき◇

昨年8月の第7回大会の後かたづけが終わってほっとしたのも束の間、もう来年のソウル大会の準備が始まっています。第1面でお知らせしたように、今度も世界児童文学大会を兼ねたかたちで実施したいというのが韓国側の意向です。また発表者は各国4名で、4つのサブ・テーマに合致した内容のものが求められています。どなたに発表していただくか、発表を希望する方の発表内容で判断して決めていかなければならないと思います。発表予定の方は早めにご準備をお願いします。

本誌はようやく10号を発行するところまで来ましたが、今後は年間2回程度発行し、関連情報の提供ということに主眼をおきます。その手始めとして、今回は仲村修、成實朋子両氏にお願いして最近の翻訳、出版状況を書いていただきました。今後は、会員の皆さんからできるだけ数多くの情報をいただいて編集していきたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

(畑中圭一)